

「須磨」巻、流謫の表現

天野, 紀代子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

70

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

2004-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009933>

日本文学誌要

第70号

目次

〈論 文〉

『須磨』巻、流滴の表現……………

李徴はなぜ虎になったか——中島敦『山月記』を読む——……………

上代のへろゴト(シ)……………

『大斎院前の御集』における「すけ」——九二〜九五番歌をめぐって——……………

源氏物語における「そら」の恐懼について……………

表現の可能性——埴谷雄高の「準詩」をめぐって……………

『落花』論——「荒ぶる神」と福三の「コンプレックス」について……………

中原中也の『ゴッホ』論……………

川端康成、その政治的まなざし——「たんぼぼ」を読む——……………

〈卒 論〉

『万の文反古』論——人の心がまこと……………

漱石の〈訓育〉……………

『死霊』一章〜四章論……………

工藤直子論——父と子をめぐって……………

〈資料紹介〉

日本文学科の古典籍(一)……………

〈法政今昔〉

消えた校舎・「小田切ゼミ」のことなど……………

〈書 評〉

坂本勝著『古事記の読み方』……………

浅沼璞著『西鶴という方法——略奪・切り裂き・増殖・滑稽』……………

偶感——勝又浩著『引用する精神』を読んで……………

黒古一夫著『作家はこのようにして生まれ、大きく変わった——大江健三郎伝説』……………

『灰谷健次郎——その「文学」と「優しさ」の陥穽』……………

阿部浪子著『本と人の風景』……………

梅地和子歌集『鬱の壺』……………

〈追 悼〉

文学研究の一つのあり方——松田修さんの逝去に因んで——……………

松田修先生追悼——故中込重明さんのかわりに、俳人として伺ったことを……………

『松田修著作集 全八巻』……………

天野紀代子……………

榎浪 俊博……………

村島 祥子……………

園 明 美……………

山崎 和子……………

田辺 友祐……………

李 忠 奎……………

山根 知子……………

東雲 かやの……………

増 田 信……………

武井 啓充……………

松平 耕一……………

佐藤 裕子……………

小秋元 段……………

溝 口 章……………

塩 沢 一平……………

中 嶋 隆……………

渡 辺 喜之……………

依 田 由紀子……………

梅 澤 亜由美……………

田 中 単之……………

立 石 伯……………

今 泉 康弘……………

原 道 生……………

……………

(一一)

(一一)

(二五)

(三三)

(四三)

(五五)

(六五)

(七六)

(八八)

(九八)

(一〇九)

(一一九)

(一二八)

(一三九)

(一四二)

(一四五)

(一四七)

(一五〇)

(一五二)

(一五四)

(一五六)

(一五八)

(一六〇)

(一六三)

(一六三)

〈論文〉

「須磨」巻、流謫の表現

『源氏物語』は「須磨」巻から書き始められた、という説がある。それは紫式部の石山寺參籠伝承と結びついた虚構であるが、なぜこうした説が生まれたのだろうか。須磨流謫の描かれ方を考える上で、そこに一つのヒントがありはしないか。また、この巻はどこを山場として読まれてきたのか。そうした享受をも視野に入れて、「須磨」巻にとつて何が第一義的なことであるのかを押さえ、この巻の表現の特質を考えてみたい。

一、起筆の原点

『源氏物語』から約二百年後に書かれた『無名草子』には、「須磨」は「あはれにいみじき巻なり」と評定され、そのあはれの中味として「京を出でたまふほどのことども」と、「旅の住まひのほど」の二つが挙げられている。これは「須磨」巻の本質を突いた読みで、とりあえず頭に置いておきたい。『無名

天野 紀代子

草子』は『源氏物語』創造の不思議を、凡夫の仕業とも思われなと言い、「まことに、仏に申し請ひたりける験にや」とも書いている。こうした人間業を超えた営みは、仏に祈願した効験としか言いようがないという最大級の称賛が、当時の観音信仰とも結びついて、石山寺に參籠して祈った結果発想し、完成させることができたという伝承に膨らんでいった。それは鎌倉期から南北朝にかけて定着し、『源氏大鏡』などが早い時期のものである。そこでの執筆の順序は「桐壺」から「夢浮橋」巻とな^年っているが、一三六二年のころ著された『河海抄』には、石山寺で「須磨」巻から起筆されたという説が加わってくる。その冒頭には、「料簡」と題して『源氏物語』成立に関する見解を、まず西宮左大臣（源高明）の安和の変が動機になったと述べた上で、次のような経緯が記されている。大斎院選子内親王の求めに応じて新たな物語制作の役を紫式部が仰せ付かり石山寺に參籠した、というまでは、多くの説話に共通する伝承で

ある。

石山寺に通夜してこの事を祈り申けるに、おりしも八月十五夜の月湖水に映りて、心の澄みわたるまゝ、に物語りの風情空にかびけるを、忘れぬさきにとて仏前にありける大般若の料紙を本尊に申うけて、まづ須磨明石の両巻を書きはじめけり。これによりて須磨の巻に、こよひは十五夜なりけりとおぼしいで、とは待るとかや。(巻第一)^(注3)

琵琶湖の湖面を見やつて、須磨の海岸を構想したのが総ての始まりだ、と言うのだ。『石山寺縁起絵』はこれ以前に成立しているが、巻四の紫式部参籠の件りは十五世紀末になって追加されたと言われている。^(注3)縁起絵の詞書にも、「湖の方はるばると見たされて」物語の想を得た、とはあるが、須磨への言及はない。よく知られた局から湖の方を見やる紫式部の図柄は、この寺の「源氏の間」の宣伝に使われこそすれ、執筆の順序などは寺にとつて関係ないことである。

『河海抄』の巻頭言には、紫式部が幼い頃から馴れ親しんでいた源高明が大宰府へ左遷されたのを嘆いて、などと年次的に史実に合わないことが記されているし、この「須磨」起筆説も真偽を問う類のことではなからう。物語発想の時点を穿鑿するのではなく、光源氏の物語が実在の人物たちに準えて出発したという、須磨流離こそを創作の原点と見る、作品創造の認識を問題としたい。「料簡」は、次のように進む。

光源氏を左大臣になぞらへ、紫上を式部が身によそへて、周公旦、白居易のいにしへをかんがへ、在納言、菅丞相のためしをひきて書き出だしけるなるべし。其の後次第に書き加へて、五十四帖になして奉りしを、権大納言行成に清書せさせられて齋院へまいらせられる。(巻第一)

光源氏の準拠は、源高明だけでなく、周公旦・白居易・在源行平・菅原道真など実際に流罪や左遷、籠居の憂き目に会った五人の例を引用して書き起こされたのであろうとする。そこが初発であるかとはともかく、「須磨」巻にとりわけ故事・先例を見るのが古注の姿勢である。源氏釈以下、紫明抄、河海抄、花鳥余情と、源氏研究は典拠の指摘が本道であった。そうした蓄積が今に、例えば小学館全集本の「付録」に一覧として列挙されているのだが、「須磨」は他の巻に抜きんで大量である。因みに「引歌一覽」に指摘されている和歌・催馬楽などが三十六首、漢籍・史書・仏典からの引用が三十項目、必ずしも長くはない本文に比して、この多さこそが「須磨」巻の特質といえる。これらの典拠引用は、一様には考えられない様々の位相を見せている。いちいちを詳述は出来ないが、この巻の引用表現の内実を改めて検討してみたい。

一、流離の侘び住まい

「須磨」巻の構成は、次のようになっていいる。

I 官位剥奪、須磨への退去を決意

Ⅱ 惜別（左大臣家、紫上、花散里、朧月夜、藤壺、桐壺院
山陵、東宮）

Ⅲ 道中

Ⅳ 京との交信（藤壺、朧月夜、紫上、致仕大臣、六条御息
所、花散里）

V 須磨の秋、冬

Ⅵ 春、宰相中将の訪問

Ⅶ 三月上巳の祓、暴風雨

I は、「世のちいとわづらはしくはしたなきことのみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもやと思しなりぬ。」という書き出しで、既に官爵が剥奪されているらしく、これ以上の事態になることを恐れて、自ら退去するというものである。行き先が須磨であることも決っている。流罪になりそうな状勢を避けて政治圏外に退く決断をしたことに関しては、Ⅱにおける惜別の応答で次第に明らかになるという書かれ方である。いったい何の罪で退くのかは自明であるかのようには、古注では問われなかったが、近代の研究ではそこを問題にし分析されている。時の政治的状勢の中で、敵方の朧月夜尚待との密通は、世人に「帝の御妻をさへ過つ」行為と噂され、公的には謀反の罪を問われる形をとった退去である。しかし光源氏自身には、藤壺との秘事こそが「帝の御妻を過つ」罪と自覚されている。東宮をも儲けているなど、須磨退去はそれらへの贖罪であることを読者は知っている。

冒頭近くに「三月二十日あまりのほどになむ都離れたまひける」としながら、離京までの四、五日をえんえんと描くのがⅡ

の別れの場面である。左大臣とのやりとりで、遠流の定めの手を打った離京であることが語られ、紫上に対しては、過失はないのだが宿世として受け入れると告げられる。藤壺との間には「思ひかけぬ罪」を共有する者同士の贈答があり、東宮の御代さえ安泰ならばという政治的判断と了解とがある。十四首目の歌をもつてする惜別の場面は、実はこのように光源氏の置かれている状況と、人には言えぬ心情とを明らかにしてくれる。「須磨」巻は、未だ京を出ないⅠとⅡとで分量的に半分を費やし、『無名草子』の言う通り「京を出でたまふほど」のあはれが重要な柱の一つであることに違はないが、それは必ずしも抒情的に描かれているわけではない。人々との応答によって、京を離れざるを得ない光源氏の立場を浮き上がらせる構造である。花の都に見捨てられた「山賤」の行き着く先は「海人の塩やく浦」と想像されるだけで、須磨は歌語によってのみ辛うじて表わされている。

Ⅲの「道中」はほとんど描かれない。「唐国に名を残しける」屈原の故事を句わせ、返る波に「うらやましくも」と在原業平の歌を口ずさみ、京を遠ざかった心境を「まことに三千里の外心地」と白居易の詩句を繋いでいるうちに、もはや須磨の浦に着いてしまう。道中の実景はもとより、流されてゆく者の具体的な像は結ばず、引用詩歌を連ねて成り立つ人工的な道行きである。この方法は、須磨に着いてからもしばらく踏襲される。行き着いた先は、在原行平が「藻塩たれつつわびける家居近きわたり」で、行平籠居の際の歌、

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に

藻塩たれつつわぶと答へよ〔古今和歌集〕962〕

を最大のイメージ源とした光景である。茅屋も葦葺きの小屋も、光源氏の目には総て珍しく、風情ある造りざまと見える。流人の謫居とは言えない、都人の侘び住まいである。心は都の方を振り返り、手紙のやりとりをする日々がⅣの部分である。藤壺、朧月夜、紫上、そして伊勢の六条御息所との交信は、「塩たるる」「うきめ灼る」といった海辺にちなんだ歌語を満載してなされる。そこには流離の心情は吐露されてはいるが、謫居の実態が表わされているわけではない。やがて心づくしの秋風が吹く頃になって、寂しさに重ねられた須磨固有の光景が描かれ始める。

三、閑居の寂寥

Vは、古来名文とされる秋の情景である。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこころに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮

くばかりになりけり。琴をすこし掻き鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は

思ふかたより風や吹くらん

とうたひたまへるに人々おどろきて、めでたうおほゆるに忍ばれで、あいなう起きあつつ、鼻を忍びやかにかみわたす。(略)

沖より舟どものうたひのしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも心細げなるに、雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠に映えたまへるは、古里の女恋しき人々の、心みな慰みにけり。

初雁は恋しき人のつらなれや

たびのそらとぶ声の悲しき

古今集の「木の問よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」と、在原行平の「旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦波」という古歌からの引用で、秋の情景が緊張感のある格調で語られ始める。白居易が香鑪峰下の草堂で遣愛寺の鐘を「枕をそばだてて」聴いたのを真似て四方の嵐を聞く、波がここまで打ち寄せてくるようで、涙をとどめ得ない。浦波も琴の音も、荒涼と響くばかりだ。

雁の声に船の楫の音を聞いて郷愁をそえられるのも、白居易に典故をもつ詩情であるが、そこに物思ふ秋の涙を重ねるのは、



挿画②



挿画①

もはや和歌のものでもある。空飛ぶ雁を見やり、都を恋う歌を詠む。

この場面が「須磨」巻を代表する図柄として確立するのは、近世になってのことと思われる。一六五〇年代に作られたと言われる『源氏物語』のデザイン集『絵本源氏物語』では、「須磨」巻は挿画①をもって代表されている。寂しさが募る秋、光源氏が海の見える廊から飛ぶ雁を眺めて涙する図柄である。江戸時代中期、土佐光成の描く「須磨」（三幅対のうち、石山寺蔵）も、沖の舟や雁を見やる源氏の像である。また挿画②は、元治元（一八六四）年版の『源氏五十四帖の図』で、一帖

に一図が当てられているが、それでも海を見る源氏の姿をもって「須磨」巻が表わされている。これらは、貴種流離の寂寞たるイメージといふべきだろう。

さらに本文は、十五夜の月に都を思つて（じせんのほかこのころ）と朗詠する光源氏に、左遷にまつわる心情をくつきりと浮かび上がらせる。この句は、都の白居易が遠方に左遷されている親友・元稹を思ふ詩の一句である。これらの交友詩で謫居の場が創られていく点については次章で問題にするが、菅原道真の〈恩賜の御衣は今ここに在り〉と吟ずることも加えて、歴史上の準拠は複合的に生かされ、用語の引用を遙かに超えた深いところで創作に係わってくる。白居易・元稹や道真の心を心とする表現がなされ、詩歌を動員しての流謫の心情が形づくられてくるのだ。

しかしこの段階で押さえておきたいことは、閑居の生活が人々から称えられ、主人公の抜きんでた美質を保障するものとしてもあることだ。何時帰れるとも知れぬ孤独を抱えていようとも、風流な暮しぶりであることには違いなく、その点では弘徽殿大后の非難は当たっている。大后は、須磨と都とで心に沁みる文通などして世間から褒め讃えられているという噂を耳にして、「朝廷の勤事」を蒙った者は謹慎生活をすべきなのに、「おもしろき家居」をして世間を誘っているなど外と、悪口を言っている。都人にとって地方の侘び住まいは、閑雅な理想郷のように仰がれもする。近世の享受者たちは、海辺に閑居する光源氏をこそ美化して描いたのだった。しかし、あれでは勤当の身の謹慎生活ではない、と非難した弘徽殿大后の言う

通りではないのか。

須磨の秋は、多くの引用詩歌で飾った濃密にして緊迫感のある文章として、よく朗読されるが、それは王朝のみやびを懂れる意識にも耐え得る閑雅な表現世界でもあるからなのだ。貴人の美意識からはみ出た土着の情景は、例えば「柴といふもの」をくすべている光景が僅かに点描されはするが、概ね従来（の歌語）によって形成される侘び住まいであり、流離の寂寥である。都では、弘徽殿の意向を憚って須磨に便りする人もなくなった、とだけ語られる。従って、一年がたとうとする春に、頭中将（今は宰相中将）がはるばると須磨にやつて来る場面は、作者の仕組んだ新しい局面と見る事が出来る。

四、謫居の再会

全体の構成ではⅥに当たるのが、流謫一年目の春の部分である。二月二十日あまりには「南殿の桜は盛りになりぬらん」と、先年の花の宴を追慕し、桜かざした日がめぐってきたと独詠する。そんな折り、罪を蒙ることも覚悟の上で、宰相中将が訪ねてくるのだ。

事の聞こえありて罪に当たるともいかかはせむと思しなして、にはかに参でたまふ。うち見るより、めづらしううれしきにも、ひとつ涙ぞこぼれける。

住まひたまへるさま、言はむ方なく唐めいたり。所のさま絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の

階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし。山がつめきて、晴色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫、うちやつれて、ことさらに田舎びもてなしたまへるしのみじう、見るに笑まれてきよらなり。（略）

飛鳥井すこしうたひて、月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、「若君の何とも世を思さでものしたまふ悲しさを、大臣の明け暮れにつけて思し嘆く」など語りたまふに、たへがたく思したり。尽きすべくもあらねば、なかなか片はしもえまねばず。夜もすがらまどろまず文作り明かしたまふ。さ言ひながらも、もの聞こえをつつみて、急ぎ帰したまふ、いとなかなかなり。御土器まゐりて、「酔ひの悲しび涙瀧く春の盃の裏」ともろ声に誦じたまふ。

一年前に光源氏の目には風情ある茅屋と見えた住まいが、異国風に据え直されて宰相中将の目の前にある。竹の垣根、石の階段、松の柱が「絵に描きたらむやう」だと敢えて言うのは、「白居易屏風」のような唐絵に描かれた草堂のイメージが、当時の人々に共有されていたからだろう。「五架三間」で石階、松柱、竹垣の山居は、当時の詩にも多く詠まれた、白居易が香鐘峰下に構えた草堂そのままであり、もし今イメージするなら、東寺伝来の「山水屏風」（十一世紀）に、その佛を見ることが出来る。光源氏と頭中将との関係が、葵上の死あたりから政治的逆境に立たされる「賢木」巻へと、権勢を無視した風流韻事の友として描かれることが多くなり、その総仕上げのように須磨での再会の場面があることについては、かつて述べたことが

ある。それらは、白居易の江州左遷時代に交した元稹ら旧友との唱和詩を多く引用することによって表わされていた。しかもここへ来て、香鑪峰下に幽居する白居易という、よく知られた絵をも援用することで、読者の前にはっきりと男同志の再会の舞台が設えられたのだ。

弘徽殿方の目がある中、勘当の者を訪ねるのは勇氣のいることだが、罪を蒙ったとて構いはしないと決行する宰相中将。この権勢に背を向けた男同志の再会の場において、初めて謫居の生活が実態をもって立ち現れる。光源氏は山賤めいた色の狩衣に指貫という質素な身なりにやつしている。身近に漁師が出入りし、馬に秣を食べさせるのと隣り合わせの生活に、中将は胸打たれる。二人は積もる話に泣いたり笑ったりで、時間を忘れる。夜は眠ることもせず漢詩を作つて明かし、翌朝別れの盃を交す時は、二人声を合わせて「酔ひの悲しび涙灑く春の盃の裏」と朗吟する。これは転任途上の白居易が元稹と長江上流の地で四年ぶりに再会し、再び別れ別れになる時に詠んだ詩の一句である。この異郷の詩人たちの流した涙を、源氏と中将もまた流すのだ。中央政権から疎外された者同志の共感と文事とは、この元・白の交友詩に裏打ちされることによって、鮮やかに定位されたのである。風流な佞び住まいが、はじめて明確に謫居の体をなしたと言える。

史実に準え、行平の歌や道真の詩句をもつて描いてきた流謫の一年であったが、どこまでも風雅な暮しぶりを出るものではなかった。作者はここに宰相中将を投げ込み、政治的構図の中に生きる男同志を描く形で、謫居の具体を開示してみせたのだ。



挿画③

そこに、中国の詩人たちの詩と絵とが寄与したこの意味は大さ。

「須磨」巻全体の中で、この再会の場面を最も重視した読みを、中世の源氏絵に見ることが出来る。図様を取り上げるのは、その時代の鑑賞の仕方に関係があると思うからである。

まず、室町時代の「白描源氏物語」は「須磨」を二図で表わした一巻で、一図は冬の日、琴を弾いて侍者たちと合奏する源氏で、二図目が、春、訪れた宰相中将をもてなす光源氏である（挿画③）。暮や双六の盤を置き、すぐ近くに馬を繋いでいる。また、桃山時代の土佐光吉筆「源氏物語画帖」（各帖一図）でも、中将訪問の図（挿画④）をもつて「須磨」巻が代表されている。二月二十日あまり、桜が咲いている。竹で編んだ垣根に葦茸さの屋根、右手の遠くには海辺の苦屋も見えている。謫居の光源

氏は狩衣にやつしていると本文にあるので、手前の直衣姿が客人の宰相中将で、簀子の狩衣姿が源氏と侍者としてであろう。春の華やかな絵ではあるが、都人の目には簡素な暮しぶりに涙誘われる場面である。

秋、独り海を見やりながら都を思う貴人と、春、一年ぶりに友との再会を果たす謫居の生活。明らかに対照をなす二様の図に、時代の受け止め方を讀むことは間違いでなからう。近世が、あくまでも光源氏の孤独に思い入れをして、より情緒的に享受したのに対して、古くは、男同士の再会に謫居の暮らしぶりを見て、〈須磨流謫〉そのものを讀みとつたのではなかった



挿画④

か。物語を和歌的な抒情から受けとめる主情主義からは、徹学的だと否定される中世の源氏讀み、つまり典拠による表現に価値を置くような享受と、これは関係があることに違いない。『源氏物語』は必ずしも一様に読まれてきたわけではなく、王朝の雅を情緒的に仰ぐ以前があつたことを、確認しておきたいと思う。

五、結びにかえて

最後のⅦ「須磨の嵐」にこそ意味を讀みとり、「須磨・明石」と切り離さない考え方もありうる。「若紫」巻で予言されていた如く明石君との出会いが第一目標ならば、そのきっかけを作つた三月上旬の暴風雨こそが重要で、須磨はその通過点にすぎない。近世初の岩佐又兵衛筆「源氏物語へ五十四帖」図「屏風（六曲一双）」は、この嵐の図で「須磨」を代表させている。画帖とは違つて配置が考慮される屏風ゆえにドラマチックな嵐の図柄が選ばれたということもあるが、明石へ導かれる物語展開をこそ最重視する讀みであろう。これら絵画化の場面から明らかになつたことは、より古い時代の方が「須磨」にとつての第一義を、Ⅵの謫居の再会に置いていることであろう。

「須磨」は、とりわけ典拠の多い巻であり、その引用に種々相があることによつて、物語創作の原初や展開を考える上で好材料である。物語は「つくり事」なのだからと、中世の準拠論を否定した本居宣長も、もし準拠を言うなら「作りぬしの心のうち」、つまり作者の構想・創作の次元に属する問題で、讀み

の次元に持ち込むべきではないと言っている。力点を変えて言うなら、広い意味での典拠・引用論は「作りぬし」の作品創造に立ち会う道として、より本質的な読み領域でもあり得るわけだ。そして「蛩」巻の物語論で言われているように、この物語の作者は、従来の漢文歴史書ではない人間の心を描く歴史書を目指していたのだから、史実に準え、実録のように見せるのは、作者本来の姿勢であった。その上で古歌も漢詩文も、内外の典籍に限らず風俗歌も民俗信仰も、あらゆるものを動員して自らの虚構世界を切り拓いていったと言える。

それも、もはや表舞台からは肅清されている源氏を主人公にしようというのだ。物語創作の動機を、源高明の左遷に触発されてと睨んだ古注釈は、モデル云々に還元されるレベルではなく、物語のテーマに深く係わる正鵠を射た指摘をしたと言わざるを得ない。そうした解釈線上に「須磨」起筆説が結びついたであろう。行平・道真・周公旦・白居易と、過剰なほどに実名を挙げた書き出しは、史実に拠りかかっている出発と認定されてもおかしくない。発想の原点や構想の順序などではなく、「源氏左遷」が本義であったことを、この際重く受けとめるべきなのだ。

光源氏のような貴人が都の外に出ることは、非現実的な、想像を絶することであったから、史実の先例から連想させ、類型的な歌語を散りばめる形で出発し、次第に引用は重層的に重ねられ、ある時は出典を読者に見せないように深く潜ませて、「源氏流謫」は形象されていった。閑雅な侘び住まいを謫居へと変貌させることが出来たのは、白居易交友圏の詩による肉づ

けあつてのことである。それは、よく知られた屏風絵のイメージを提出することで、読者と共有するものともなった。こうした多彩な引用を駆使することで、表現の厚みを獲得し、説得力を持ち得た巻として「須磨」巻を再確認したい。

〈注〉

- 1 南北朝時代に成った源氏の梗概書である「源氏大鏡」など、こうした伝承については伊井春樹の「湖水の月」(『源氏物語の伝説』昭和出版 一九七六年)に詳しい。
- 2 「河海抄」(角川書店『紫明抄河海抄』)は、句読点を施し、漢字に改めるなど読みやすくした。
- 3 巻四の詞書は、三条西実隆筆と言われている。(梅津次郎「石山寺縁起絵について」『新修日本絵巻物全集 石山寺縁起絵』角川書店 一九七九年)
- 4 引用文は、小学館新編日本古典文学全集「源氏物語」による。阿部秋生「須磨・明石の源氏」(『源氏物語研究序説』東大出版会 一九五九年)、鈴木日出男「光源氏の須磨流謫をめぐって」(『文学』一九七八年七月)など。
- 6 「絵本源氏物語」の「須磨」巻(鶴見大学付属図書館蔵)は八図あるが、二枚つづりが唯一この図(挿画①)で、雁を眺める光源氏像である。(『絵本源氏物語』日本古典文学会編 一九八八年)
- 7 拙稿「交友の方法―沈淪・流謫の男同志―」(『文学』一九八二年八月)
- 8 これは白居易が元和十(八一五)年三月に元稹と別れ、十四年三月に峡中で再会した時、舟を留めて三日間語り合って別

れた、という長大な題を持つ詩（『白氏文集』巻十七）からの引用である。

9 「白描源氏物語 須磨一卷」石山寺藏（林恭子『かたちの中

の源氏物語』弓立社 二〇〇三年）

10 『源氏物語画帖 詞書翻字・図様解説』（今西祐一郎編 勉

誠社 一九九七年）では、この廂の人物を「直衣姿の源氏」

としているが当たらない。ここはあくまで宰相中将の訪問の

場面と見るべきである。

「源氏物語画帖」は京都国立博物館所蔵。

（あまのきよこ・文学部教授）

※ 本稿は、二〇〇四年二月末のフランス出張の際に、パリの東

洋言語文化研究所 (INALCO) の小さな集まりで行なった口

頭発表を、文章に改めたものである。

その際に使用した図版の多くは割愛した。